

作物名 (分析部位) 実施年	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)					
					個別定量				一括定量	
					ピフェナゼート		代謝物B		ピフェナゼート及 び代謝物Bの合量	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
日本なし (果実) 2001年	4	400-1000	1	1 3 7	/	/	/	/	0.60 0.51 0.29	0.38 0.34 0.18
もも (果肉) 1998年	2	800-1200	1	7 14 21 28	0.01 0.01 0.01 <0.01	0.01* 0.01* 0.01* <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01	0.01 <0.01 <0.01 <0.01	0.01* <0.01 <0.01 <0.01
もも (果肉) 2003年	2	800-1400	1	1 3 7	/	/	/	/	<0.02 <0.02 <0.02	<0.02 <0.02 <0.02
もも (果皮) 2003年	2	800-1400	1	1 3 7	/	/	/	/	9.19 9.81 3.86	6.83 5.96 3.20
すもも (果実) 2001年	2	800-1000	1	3 7 14	/	/	/	/	0.33 0.21 0.06	0.15 0.15 0.04*
おうとう (果実) 1998年	2	1200	1	14 21 28 42	0.44 0.28 0.19 0.15	0.28 0.21 0.07 0.06	0.11 0.05 0.04 0.05	0.08 0.04 0.02* 0.02*	0.49 0.33 0.21 0.09	0.38 0.24 0.13 0.06
いちご (果実) 1997年	2	400-500	1	1 3 7	0.86 1.08 0.67	0.81 0.79 0.44	0.06 0.11 0.05	0.04 0.05 0.03	0.92 0.93 0.69	0.81 0.84 0.61
いちご (果実) 2003年	2	500	2	1 3 7	/	/	/	/	2.00 1.34 0.99	1.11 0.75 0.48
いちご (果実) 2003年	2	くん煙剤 37.5mgai/m <sup>3</sup>	2	1 3 7	/	/	/	/	0.24 0.13 <0.05	0.13 0.08* <0.05
ぶどう (果実) 1997年	2	800	1	7 14 21 30 44-45	2.03 2.39 0.94 1.21 1.41	1.13 0.98 0.55 0.76 0.73	0.19 0.23 0.14 0.13 0.14	0.09* 0.10 0.08 0.07 0.08	2.17 2.66 1.09 1.28 1.52	1.37 1.51 0.77 0.91 0.93
ぶどう (果実) 1999年	2	800	1	14 21 28 42	1.92 0.96 0.81 0.60	1.02 0.54 0.47 0.38	0.25 0.10 0.07 0.08	0.13 0.06 0.05 0.05	1.95 1.05 0.88 0.67	1.03 0.56 0.51 0.40
いちじく (果実) 2003年	2	600	1	1 3 7	/	/	/	/	0.56 0.31 0.17	0.54 0.26 0.12
茶 (荒茶) 1998年	2	800	1	7 14 21	22.7 0.78 0.05	13.3 0.58 0.05*	1.43 0.06 <0.05	0.68 0.05 0.05*	20.4 0.71 0.05	12.7 0.54 0.05*
茶 (抽出液) 1998年	2	800	1	7 13-14 20-21	4.69 0.17 <0.05	3.04 0.12 <0.05	0.67 <0.05 <0.05	0.38 <0.05 <0.05	4.63 0.18 <0.05	2.97 0.13 <0.05

注) ai : 有効成分量、PHI : 最終使用から収穫までの日数

- ・ピフェナゼートと代謝物Bは個別定量の測定値、合量については一括定量の測定値。
- ・記載した試験ではすべてフロアブル剤 (SC) を用いた。
- ・一部に検出限界以下を含むデータの平均を計算する場合は検出限界値を検出したものとして計算し、※印を付した。
- ・全てのデータが検出限界以下の場合は検出限界値の平均に<を付して記載した。

<別紙 3 : 検査値等略称>

略称	名称
ALP	アルカリフォスファターゼ
Ht	ヘマトクリット
MCH	平均赤血球血色素量
MCHC	平均赤血球血色素濃度
MCV	平均赤血球容積

<参照>

- 1 食品健康影響評価について：食品安全委員会第 64 回会合資料 1-1 (HP : <http://www.fsc.go.jp/hyouka/hy/hy-uke-bunsho-161005-bifenazate.pdf>)
- 2 「ピフェナゼート」、「クロチアニジン」及び「カズサホス」の食品衛生法（昭和 22 年法律第 233 号）第 11 条第 1 項の規定に基づく、食品中の残留基準設定に係る食品健康影響評価について：食品安全委員会第 64 回会合資料 1-5 (HP : <http://www.fsc.go.jp/iinkai/i-dai64/dai64kai-siryou1-5.pdf>)
- 3 第 18 回食品安全委員会農薬専門調査会 (HP : <http://www.fsc.go.jp/senmon/nouyaku/n-dai18/index.html>)
- 4 農薬要覧：日本植物防疫協会、2003 年
- 5 農薬抄録ピフェナゼート（殺虫剤）（平成 16 年 8 月 20 日改訂）：日産化学工業株式会社、2004 年、一部公表予定 (HP : <http://www.fsc.go.jp/hyouka/iken.html#02>)
- 6 ラットにおける吸収、分布、代謝及び排泄 (GLP 対応) : Ricerca, Inc.(米)、1999 年、未公表
- 7 雌ラットにおける組織内濃度：日産化学工業（株）、1999 年、未公表
- 8 ラットにおける血漿、赤血球及び脾臓中代謝物 (200 及び 10mg/kg) : 日産化学工業（株）、2000 年、未公表
- 9 ピフェナゼートの安全性評価資料の追加提出（要望事項に対する回答資料）：日産化学工業（株）、2000 年、未公表
- 10 カルボニル標識 D2341 のラットにおける吸収、分布、代謝及び排泄：日産化学工業（株）、1999 年、未公表
- 11 ラット門脈血漿中 D2341 及び D3598 の分析：日産化学工業（株）、1999 年、未公表
- 12 D2341 及び D3598 のラットにおける吸収、分布、代謝及び排泄：日産化学工業（株）、1999 年、未公表
- 13 温州みかんにおける代謝試験 (GLP 対応) : (財) 残留農薬研究所、1998 年、未公表
- 14 温州みかんにおける代謝試験 (カルボニル標識及びフェニル標識 D2341 の比較代謝) : 日産化学工業（株）、2000 年、未公表
- 15 オレンジにおける代謝試験 (GLP 対応) : Ricerca, Inc.(米)、1999 年、未公表
- 16 りんごにおける代謝試験 (GLP 対応) : Ricerca, Inc.(米)、1998 年、未公表
- 17 なす幼植物における代謝試験：日産化学工業（株）、2004 年、未公表
- 18 土壌処理後のなすへの吸収、移行及び代謝：日産化学工業（株）、1999 年、未公表
- 19 好気土壌における代謝 (日本土壌) (GLP 対応) : (財) 残留農薬研究所、1998 年、未公表
- 20 好気土壌における代謝 (米国土壌) (GLP 対応) : Ricerca, Inc.(米)、1996 年、未公表
- 21 好気土壌における代謝 (日本土壌) : 日産化学工業（株）、1999 年、未公表
- 22 嫌気性湛水底質における代謝 (米国底質土) (GLP 対応) : Ricerca, Inc.(米)、1998 年、未公表
- 23 代謝分解物 D1989 (記号 D) の土壌吸脱着 (日本土壌) : 日産化学工業（株）、1999 年、未公表
- 24 土壌カラムリーチング試験 (米国土壌) (GLP 対応) : Ricerca, Inc.(米)、1997 年、未公表

- 25 加水分解試験 (OECD111 準拠 : pH4、7、9/25°C、35°C) : 日産化学工業 (株)、1999年、未公表
- 26 加水分解試験(pH4、5、7及び9/25°C)(GLP対応) : Ricerca, Inc.(米)、1997年、未公表
- 27 自然水及び滅菌蒸留水における水中光分解 : 日産化学工業 (株)、1999年、未公表
- 28 pH5 滅菌緩衝液における水中光分解(GLP対応) : Ricerca, Inc.(米)、1997年、未公表
- 29 自然水及びpH7 滅菌緩衝液における水中光分解 : Ricerca, Inc.(米)、1998年、未公表
- 30 分解物 D3598 (記号 B) の水中光分解 : 日産化学工業 (株)、1999年、未公表
- 31 ビフェナゼートの作物残留試験成績 : 日産化学工業 (株)、2003年、未公表
- 32 ビフェナゼートの作物残留試験成績 : (財) 残留農薬研究所、2003年、未公表
- 33 ビフェナゼートの作物残留試験成績 : 愛知県農業総合試験場、2003年、未公表
- 34 国民栄養の現状－平成10年国民栄養調査結果－ : 健康・栄養情報研究会編、2000年
- 35 国民栄養の現状－平成11年国民栄養調査結果－ : 健康・栄養情報研究会編、2001年
- 36 国民栄養の現状－平成12年国民栄養調査結果－ : 健康・栄養情報研究会編、2002年
- 37 ビフェナゼートの土壌残留試験成績 : 日産化学工業 (株)、1998年、未公表
- 38 ラットにおける急性経口毒性試験 (GLP対応) : (財) 残留農薬研究所、1998年、未公表
- 39 マウスにおける急性経口毒性試験 (GLP対応) : (財) 残留農薬研究所、1998年、未公表
- 40 ラットにおける急性経皮毒性試験 (GLP対応) : Huntingdon Life Sciences Ltd. (英)、1996年未公表
- 41 ラットにおける急性吸入毒性試験 (GLP対応) : Huntingdon Life Sciences Ltd. (英)、1996年、未公表
- 42 代謝物 B(D3598)のマウスにおける急性経口毒性試験 (GLP対応) : Huntingdon Life Sciences Ltd. (英)、1998年、未公表
- 43 代謝物 D(D1989)のマウスにおける急性経口毒性試験 (GLP対応) : (株) 実医研、1998年、未公表
- 44 ウサギを用いた皮膚一次刺激性試験 (GLP対応) : Huntingdon Life Sciences Ltd. (英)、1996年、未公表
- 45 ウサギを用いた粘膜一次刺激性試験 (GLP対応) : Huntingdon Life Sciences Ltd. (英)、1996年、未公表
- 46 モルモットを用いた皮膚感作性試験 (GLP対応) : (財) 残留農薬研究所、1998年、未公表
- 47 マウスを用いた亜急性経口毒性試験 (GLP対応) : Covance Laboratories Inc. (米)、1997年、未公表
- 48 ラットを用いた亜急性経口毒性試験 (GLP対応) : Covance Laboratories Inc. (米)、1997年、未公表
- 49 イヌを用いた亜急性経口毒性試験 (GLP対応) : MPI Research (米)、1997年、未公表
- 50 ラットを用いた亜急性経皮毒性試験 (GLP対応) : MPI Research (米)、1998年、未公表
- 51 イヌにおける慢性毒性試験 (GLP対応) : MPI Research (米)、1998年、未公表
- 52 ラットにおける慢性毒性/発がん性併合試験 (GLP対応) : Covance (米)、1999年、未公表
- 53 マウスにおける発がん性試験 (GLP対応) : Covance (米)、1999年、未公表
- 54 ビフェナゼートのラットにおける2世代繁殖試験 (GLP対応) : WIL Research Laboratories, Inc. (米)、1999年、未公表

- 55 ビフェナゼートのラットにおける2世代繁殖試験(追加試験) (GLP 対応) : WIL Research Laboratories, Inc. (米)、1999年、未公表
- 56 ラットにおける催奇形性試験 (GLP 対応) : WIL Research Laboratories, Inc. (米)、1997年、未公表
- 57 ウサギにおける催奇形性試験 (GLP 対応) : WIL Research Laboratories, Inc. (米)、1997年、未公表
- 58 細菌を用いた復帰変異性試験 (GLP 対応) : Microbiological Associates, Inc. (米)、1996年、未公表
- 59 マウス L5178Y 細胞を用いた遺伝子突然変異試験 (GLP 対応) : Microbiological Associates, Inc. (米)、1996年、未公表
- 60 ハムスターの卵巣由来培養細胞 (CHO) を用いた *in vitro* 染色体異常試験 (GLP 対応) : Microbiological Associates, Inc. (米)、1996年、未公表
- 61 マウスを用いた小核試験 (GLP 対応) : Microbiological Associates, Inc. (米)、1996年、未公表
- 62 細菌を用いた DNA 修復試験 (GLP 対応) : (株) 実医研、1998年、未公表
- 63 ラットを用いた *in vivo* 肝不定期 DNA(UDS)試験 (GLP 対応) : (財) 食品薬品安全センター 秦野研究所、1999年、未公表
- 64 代謝物 B(D3598)の細菌を用いた復帰変異性試験 (GLP 対応) : Microbiological Associates, Inc. (米)、1991年、未公表
- 65 代謝物 D(D1989)の細菌を用いた復帰変異性試験 (GLP 対応) : (株) 実医研、1998年、未公表
- 66 代謝物 B(D3598)のマウス L5178Y 細胞を用いた遺伝子突然変異試験 (GLP 対応) : Microbiological Associates, Inc. (米)、1992年、未公表
- 67 代謝物 B(D3598)のマウスを用いた小核試験 (GLP 対応) : Microbiological Associates, Inc. (米)、1992年、未公表
- 68 ビフェナゼートにおける薬理試験 (GLP 対応) : (財) 残留農薬研究所、1998年、未公表
- 69 ハイイツ小体確認試験 : 日産化学工業 (株)、1999年、未公表
- 70 貧血確認試験 : 日産化学工業 (株)、2000年、未公表

平成17年3月3日

薬事・食品衛生審議会  
食品衛生分科会長 吉倉 廣 殿

薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会  
農薬・動物用医薬品部会長 井上 達

薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会  
農薬・動物用医薬品部会報告について

平成16年12月9日厚生労働省発食安第1209003号をもって諮問された、食品衛生法（昭和22年法律第233号）第11条第1項の規定に基づくピフェナゼートに係る食品規格（農産物等に係る農薬の残留基準）の設定について、当部会で審議を行った結果を別添のとおり取りまとめたので、これを報告する。

## ビフェナゼート

1. 品目名：ビフェナゼート (bifenazate)

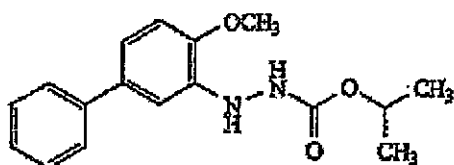
2. 用途：殺虫剤

ヒドラジン骨格を有する殺虫剤である。  
ハダニやサビダニに対し速効的な効果を示す。

3. 化学名 (IUPAC)

イソプロピル=(4-メトキシビフェニル-3-イル)ヒドラジノホルマート  
(isopropyl 2-(4-methoxybiphenyl-3-yl)hydrazinoformate)

4. 構造式及び物性



分子式  $C_{17}H_{20}N_2O_3$   
 分子量 300.36  
 水溶解度 0.00206 g/L (20°C)  
 分配係数  $\log P_{ow} = 3.4 \pm 2.85\%$   
 (n-オクタノール/水)

(メーカー提出資料)

5. 適用病害虫の範囲及び使用方法

表1及び表2に本剤の適用病害虫の範囲及び使用方法を示す。

今回の適用拡大申請の内容は、いちごへの使用回数の変更(1回→2回以内)及びいちじくへの使用である。(下線部参照)

表1 ビフェナゼート 20%フロアブル剤<sup>(注)</sup>

作物名	適用 病害虫名	使用方法					
		希釈倍 数(倍)	散布液量 (L/10a)	使用時期	本剤の 使用回数	方法	ビフェナゼートを含む 農薬の総使用回数
トマト ミニトマト	ハダニ類, トマトサ ビダニ	1,000	150~300	収穫前日 まで	1回	散布	1回
なす	ハダニ類	1,000	150~300	収穫前日 まで	1回	散布	1回
きゅうり	ハダニ類	1,000	150~300	収穫前日 まで	1回	散布	1回

すいか	ハダニ類	1,000	150~300	収穫前日まで	1回	散布	1回
メロン	ハダニ類	1,000	150~300	収穫前日まで	1回	散布	1回
かんきつ	ミカンハダニ、ミカンハダニ	1,000~1,500	200~700	収穫7日前まで	1回	散布	1回
りんご	ナミハダニ	1,000~1,500	200~700	収穫前日まで	1回	散布	1回
	リンゴハダニ	1,000					
なし	ハダニ類	1,000~1,500	200~700	収穫前日まで	1回	散布	1回
もも	ハダニ類	1,000~1,500	200~700	収穫前日まで	1回	散布	1回
	モモハダニ	1,000					
すもも	ハダニ類	1,000~1,500	200~700	収穫3日前まで	1回	散布	1回
おうとう	ハダニ類	1,000~1,500	200~700	収穫14日前まで	1回	散布	1回
いちご	ハダニ類	1,000	150~300	収穫前日まで	<u>2回以内</u>	散布	<u>2回以内</u>
ぶどう	ハダニ類	1,000~1,500	200~700	収穫21日前まで	1回	散布	1回
<u>いちじく</u>	<u>ハダニ類</u>	<u>1,000</u>	<u>200~700</u>	<u>収穫前日まで</u>	<u>1回</u>	<u>散布</u>	<u>1回</u>
茶	カザリハダニ、チャノガハダニ	1,000	200~400	摘採14日前まで	1回	散布	1回

注) フロアブル剤(懸濁剤): 農薬原体(水不溶性固体)を湿式微粉碎し、補助剤(湿潤剤、分散剤、凍結防止剤、増粘剤、防腐剤など)を加え水に分散させたスラリー状の剤。希釈液は白濁し不透明である。[出典: 植物防疫講座 第3版(社団法人日本植物防疫協会)]

表2 ビフェナゼート15%くん煙剤

作物名	適用病害虫名	使用方法					
		適用場所	使用量	使用時期	本剤の使用回数	方法	ビフェナゼートを含む農薬の総使用回数
いちご	ハダニ類	温室・ビニールハウス等密閉できる場所	くん煙室容積400m <sup>3</sup> 当たり100g	収穫前日まで	<u>2回以内</u>	くん煙	<u>2回以内</u>



(参考) いちごの適用拡大申請について (農林水産省のコメント)

○いちごへの使用回数を1回から2回に変更することについて

本剤の適用害虫であるハダニ類は、いちごの重要な害虫であり、防除が必須となっている。

いちごの一般的な栽培体系である促成栽培においては9月に定植し、11月から5月まで収穫する。収穫期間が7ヶ月と長期にわたっており、この間のハダニ類の防除がいちごの安定的な収穫のために重要である。通常、保温開始時、初発生確認時、発生増加期に3回以上の防除が必要となる。

一方、本剤は、ハダニ類に効果の高い剤であるため、生産現場から多数回使用の要望が強いことから、申請どおり2回使用を認めることとしたものである。

○いちごのハダニ類への使用時期として収穫前日が必要な理由

いちごは、きゅうり・なす・ピーマンなどの果菜類と同様、収穫を毎日行うので収穫前日まで使用できることが必要となる。

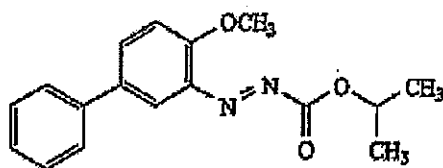
## 6. 作物残留

### (1) 分析の概要

#### ① 分析対象の化合物

ビフェナゼート本体のほか、なし、オレンジ等において残留量の多いD3598 (代謝物B) についても対象とした。

代謝物B: イソプロピル=(4-メトキシビフェニル-3-イル)ジアゼニルホルマート  
(isopropyl 2-(4-methoxybiphenyl-3-yl)diazenylformate)



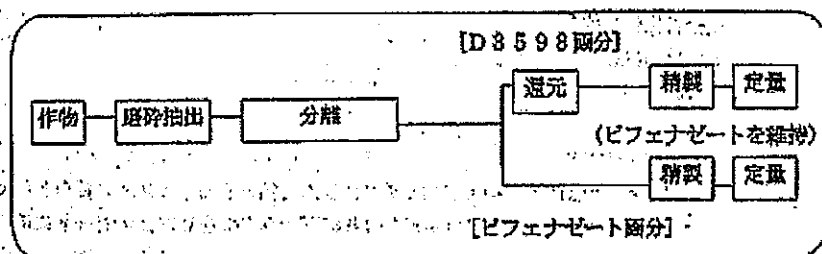
#### ② 分析法の概要

ビフェナゼートと代謝物Bを個別に測定する個別定量及びビフェナゼートと代謝物Bの両化合物の含量値を測定する一括定量が実施された。(以下の図を参照)

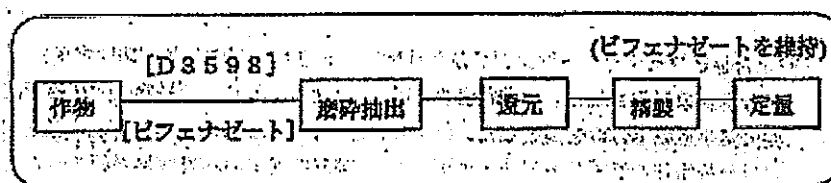
なお、ビフェナゼートと代謝物Bは、作物の抽出エキス中、あるいは分析操作の段階でもビフェナゼートと代謝物Bの間で相互変換を生じることが確認されたため、アスコルビン酸の共存化にてビフェナゼートの形を維持させて精製操作が実施された。

(メーカー提出資料)

【個別定量】 すみやかにビフェナゼート画分とD3598画分を分離したのち、各々の画分を常にアスコルビン酸の共存化にてビフェナゼートの形を維持させて精製操作を実施する方法。高速液体クロマトグラフィー（蛍光検出器）で定量。検出限界は0.01～0.02 ppm。



【一括定量】 アスコルビン酸の共存化にてD3598をビフェナゼートの形に変換／維持させ、両化合物の含量値を測定する方法。高速液体クロマトグラフィー（蛍光検出器）で定量。検出限界は0.01 ppm。



## (2) 作物残留試験結果

以下に示す作物残留試験の結果は、ビフェナゼートと代謝物Bを合計した値（個別定量にあつては、 $\text{ビフェナゼート} + \{\text{代謝物B} \times \text{換算係数}(1.007)\}$ ）を示している。ただし、茶については、膨潤操作中に代謝物Bの一部がビフェナゼートに変換することが確認されており、茶（荒茶）を個別定量した場合の合計値は（ビフェナゼート＋代謝物B）となっている。

なお、一部の作物を除き、ほとんどの作物について、個別定量と一括定量によって分析が行われている。

### ① トマト

トマト（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（250 L/10a）したところ、散布後1～14日の最大残留量<sup>注</sup>は0.32, 0.11 ppmであった。

### ② なす

なすを用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（200 L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.53, 0.55 ppmであ

った。

### ③きゅうり

きゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（250, 304 L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.12, 0.14 ppmであった。

### ④すいか

すいか（可食部）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（200 L/10a）したところ、散布後1～21日の最大残留量は0.03, 0.02 ppmであった。

### ⑤メロン

メロン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（200 L/10a）したところ、散布後1～14日の最大残留量は0.04, <0.02 ppmであった。

### ⑥かんきつ

#### ⑥-1 温州みかん

温州みかん（果肉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（600 L/10a, 5L/4樹/区）したところ、散布後7～45日の最大残留量は0.02, 0.03 ppmであった。

また、温州みかん（果皮）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（600 L/10a, 5L/4樹/区）したところ、散布後7～45日の最大残留量は1.88, 3.96 ppmであった。

#### ⑥-2 夏みかん

夏みかん（果肉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（500, 600 L/10a）したところ、散布後7～45日の最大残留量は0.03, 0.02 ppmであった。

また、夏みかん（果皮）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（500, 600 L/10a）したところ、散布後7～45日の最大残留量は0.70, 0.92 ppmであった。

さらに、夏みかん（全果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（500, 600 L/10a）したところ、散布後7～45日の最大残留量は0.23, 0.31 ppmであった。

#### ⑥-3 すだち

すだち（果実）を用いた作物残留試験（1例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（600 L/10a）したところ、散布後7～45日の最大残留量は0.26 ppmであった。

#### ⑥-4 かぼす

かぼす（果実）を用いた作物残留試験（1例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（700 L/10a）したところ、散布後7～28日の最大残留量は0.30 ppmであった。

#### ⑦りんご

りんご（果実）を用いた作物残留試験（4例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（500, 600 L/10a）したところ、散布後1～30日の最大残留量は0.41, 0.76, 0.83, 0.82 ppmであった。

#### ⑧なし

日本なし（果実）を用いた作物残留試験（8例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（200, 350, 400, 500, 600 L/10a）したところ、散布後1～28日の最大残留量は0.45, 0.44, 0.58, 1.33, 0.54, 0.32, 0.56, 0.24 ppmであった。

#### ⑨もも

もも（果肉）を用いた作物残留試験（4例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（400, 600, 700 L/10a）したところ、散布後1～28日の最大残留量は0.02, 0.02, <0.02, <0.02 ppmであった。

また、もも（果皮）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（400, 700 L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は9.68, 6.89 ppmであった。

#### ⑩すもも

すもも（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（400, 500 L/10a）したところ、散布後3～14日の最大残留量は0.32, 0.14 ppmであった。

#### ⑪おうとう

おうとう（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（600 L/10a）したところ、散布後14～42日の最大残留量は0.28, 0.52 ppmであった。

#### ⑫いちご

いちご（果実）を用いた作物残留試験（4例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を計1又は2回散布（200, 250 L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.89, 1.09, 0.42, 1.98 ppmであった。

また、いちご（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、15%くん煙剤を計2回使用（100 g/400 m<sup>3</sup>）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.07, 0.24 ppmであった。

#### ⑬ぶどう

ぶどう（果実）を用いた作物残留試験（4例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（400 L/10a）したところ、散布後21～45日の最大残留量は1.54, 0.54, 0.19, 1.05 ppmであった。

#### ⑭いちじく

いちじく（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液を1回散布（300 L/10a）したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.53, 0.55 ppmであった。

#### ⑮茶

茶（荒茶）を用いた作物残留試験（2例）において、20%フロアブルの1,000倍希釈液